

---

# 太陽の子

ハルメク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽の子

### 【NZコード】

N1080A

### 【作者名】

ハルメク

### 【あらすじ】

浸食される太陽、そして突然現れた1人の少年。「太陽はね、生命エネルギーの源なんだ」太陽と影の世界。僕と坂城は戦わなければならなかつた。どちらが浸食されるか、どちらが喰われるか。

## 序：夕日と少年

あれは陽が空を半分赤にもう半分を紫にしていた時に起こった。僕はその頃小学三年生で、友達と山の開けた場所にある空き地で遊んだ帰り道にその赤と紫の空を見ていた。体が赤と紫に貫かれてゆくのがなんとなく嬉しい。そう感じた。

友達は先に帰ってしまった。

でも僕はさみしくなんなくて、陽に照らされて誇らしいと思った。空き地で転けた時にできたキズも陽を浴びて痛みがなくなつていった。太陽は偉大だ、と思つ一瞬。

「太陽はね、生命エネルギーの源なんだ」

紫が赤を漫食しはじめたのを僕が気づいたのと同時に、横にいつの間にか男の子が立つていて太陽の沈むのを見ながら僕に言った。

「だから君の傷も癒せる。ほら、」

あつたかいと感じる。

膝に手が触れている。

男の子の手だった。手の隙間から光が漏れる。太陽の陽に似ている。

「これでいい

男の子が手をのけると膝の傷がなくなつっていた。治つていた。

「ありがとう」

僕は心から言った。不思議だと思つたけど太陽の力ならなつとくできると思つた。

「いいんだよ。でも太陽の力は太陽が出ている時にしか効果はないんだ。力の源はあくまでも太陽自身だからね」

僕はうなずく。

筋が通つていると思う。

そして、太陽はもう空にはなかつた。紫が今度は完璧な黒になろうとしている。

あたりまえのように、僕の横にはあの男の子はいなかつた。

あたりまえのように消えた。

でも僕はまた会えるような、なんの根拠もない考えがあつた。

考えというより願いに近い、もつとも薄く弱いものだつた。

僕はその薄く弱いものを抱えて、完璧な黒が侵した空間を走つた。自分の家を丌指して。

これはアニメとか本でよくある始まりまたは序章とかいうものだつたのかもしない。

何か不思議で心踊る冒険とかの選ばれた者だけが入ることの許される秘密の入り口だつたんだ。

## &1t・第一話&gt; ;

陽は落ちかけている。圧倒的な赤が空を支配している様子が僕の目に見える。

小学三年生の僕から高校二年生になつた僕は帰り道に寄つた公園で夕陽を見ていた。

この公園は全く手入れがされていないようだ、地面からいくつもの雑草が生えている。僕は親の仕事の都合で元いた町から離れた高校に入学した。

僕は初めての引っ越しで慣れ親しんだ町と友達を失つた。会えないわけじゃないけど難しい。

メールと電話ぐらいしか友達と会える手段はなかつた。

僕は変わつてしまつた。

元の町にいた時と。

でも元の町に行つたとしたら昔の僕に戻ると思つ。  
でもここじゃ無理だ。

高校で僕はほとんど人と喋らない。

人を避けてしまう。

なぜかはわからない。

今日の授業中、あの小学三年生の時の出来事を突然思い出したのと同じように。

あの男の子の顔とか容姿はほとんど覚えていない。

でもあの不思議な力は覚えている。僕の傷を治した太陽の力。  
陽は落ちかけている。あの日と同じような赤と紫の空になつてゐる。

「こんな感じだったつけ。あの男の子に会つたのは」

そんなことを心の中で言

う。

「そうだね。こんな感じの夕方だったよ、君にあつたのは」  
僕の後ろで声がした。

心の中で呟いたことに答えるみたいだった。  
振り向いた。僕はあの日の男の子を見た。

「久しぶりだね。なんとなく君だとわかつたよ。あれは小学校の時  
だつたかな」

僕もなんとなくわかつた。

金髪の男の子、僕と同じぐらいの歳になつたあの日の男の子。

「あの時傷を治してくれた男の子だよね」

僕はわかつてた。

あの日の男の子だと、なんとなく。でも聞くのが普通かなと思つて聞いた。

「傷？　ああ、そういうえば君はあの時、膝に擦り傷があつたね。うん、確かに君の傷を治したよ。」

やつぱりだ。

あの時の男の子なんだ。

落陽とともに僕の前に突然現れた男の子。

僕は聞きたいことを全て、一息に聞いてみた。

「なんで君は突然僕の前に現れたのかが不思議なんだあの日から小學生の時から。そして、今もね。あの時どうやって僕の傷を治せたかも」

金髪男の子はあの日と同じ空を、あの日と同じように見ていく。  
少し成長した僕の目は男の子を思慮深い人のように思わせ見せた。  
男の子の口が動いた。

「僕にはやる事があるんだ。大切なことが。それと君が僕のことを思い出したからかな。これでなぜ僕が君の前に突然現れるかが説明できたね。もう一つの質問だけどそれはあの日に言つたとおりだよ。男の子が突然現れること・・の核心を知りたかった。

「じめん。今言える」とはこれくらいしかないんだ。君はもつと具体的な核心を求めてるね。」

また僕の心を読んだかのような言動。顔に書いてしまうのだろうか、僕は。

「これも太陽の力さ。人の心が読めてしまう。太陽が出ている時だけね。」

謎の男の子なんだ。ああ、やつとわかつた。  
「僕は不思議な事に巻き込まれてるのかも」  
僕は不意に言った。もう紫が勝っている空だ。

「そうだね。そつかもしれない。まあ折々話すよ君に、全てを。」

僕は紫の空を見ていた。たぶん謎の男の子も空を見ていたと思う。「なんで僕なの」

と言おうと横を向くと、男の子はあの口と同じようにいなくなっていた。突然に。

小学生の頃に出会った男の子との奇跡的で不思議な再会を果たした僕は、公園から出て春の闇が覆い被さろうとしている勾配の激しい坂を登り、住宅地で一番新しい我が家に帰った。

僕は夕飯を食べ、風呂に入つた。

湯船の温度は丁度よくて、風呂と一体化したような気分になる。僕の体が気持ちよいと言つように身震いさせた時に、僕は気がついた。

公園で再会した男の子は僕と同じ高校の制服を着ていた。僕は明日を思つて溜め息をした。

朝。僕は太陽によつて起こされる。

二階の僕の部屋は日当たりがよくて、窓ガラスに陽がビームのようにきつく照りつけている。

枕に沈んでいる頭の部分以外の髪がだんだんと熱を帯びてきた。僕はビームのような陽を手で防御しながら起きあがる。僕のいつもの一日の始まりだ。

僕は朝食

を食べて、歯を磨き顔を洗う。洗面台の鏡は膨れた眠そうな僕の顔を映している。

制服に着替えた僕は時計を見る。

ヤバいと思う。かなり遅刻していた。陽射しが強いわけがわかつた。

友達からよくぼんやりしていると言われるけど、ここまで寝坊したりしたことはなかつた。

僕は生活面ではきちんとしているほうだ。

親は共働きだから朝早くに家を出てしまう。

だから僕は一人で起き、一人で朝食を作つて食べる。結構自立してると思う。

僕は家の扉をダイナマイトで爆破させたような勢いで開け、そしてカバンを振りながら走る。

早く駅に行き、HRが終わった時間帯の学校に着かなくてはと思った。

そして、力強く地面を蹴る。それを繰り返す。

食べた直後に激しい運動をしたので脇腹が痛くなつた。

脇腹を押さえながら駅に到着。人の行き交うのを縫つようにして

## 改札を通る

学校方面に行く電車に乗った僕は走りながら、脇腹を押さえながら走ってきた道にあつた公園を思い出していた。

昨日あの不思議な少年と再会した場所。

あそこ伸びきっていた雑草が綺麗に除草されていたことに気がついた。

学校に着いた。

着いたと言つても学校の敷地内の校門辺りにいるだけでまだ学校に入つていない。

僕はまた走つた。脇腹はなんとなく落ち着いていた。

教室は結構騒がしかつた。

教室内の時計を見ると一時間目が終わつて休み時間になつていうようだつた。

「珍しいな。浅野が遅れるなんて。ほら、今日お前が口直な

「そう声を掛けてきたのは同じクラスの奥山 正だつた。

「寝坊したんだよ。起きたらもうH.E.Rが終わつてる時間だつた。」

カバンを机のフックにかけながら言つた。

奥山は学校では言葉を交わすだけの仲だ。こんなのは友達とは言えない。

「そうか。寝坊は誰にでもあるもんな。てか、転校生来たの知ってるか。」

「ああ、知つてるよ。不思議な力を使える金髪の男の子だろ

と言おうと思つたけどやめた。

「へえ。珍しいね。どんな人。」

僕は素知らぬ顔で言つた。奥山が教室の奥の席に顎をしゃくる。

「あいつだよ。」

顎の先には本を読んでいる、昨日再会した不思議な少年がいた。  
少年は本から顎を上げて、僕の視線を自分の視線と絡める。目が  
合つて少年は微笑んだ。

「お前、坂城にきにいられたんじゃねえの？」

僕の横にいた奥山が言った。一タついた顔に腹が立つ。僕は不思議な少年の席に向かって歩いた。少年はまだ僕に笑い掛けている。

「びっくりした？ 昨日の公園の時点で気づいてくれると思つたんだけどなあ」

笑いを崩さずに語る少年。いたずらっ子みたいに幼い笑顔だ。

「なんで君がこの学校に？」

「言つたじやないか。やる事があるから、ここにこる。そして、そのやる事の内容を君に知つてもらつためだよ。」

真面目な声と、明るい顔で言った少年。

「ちなみに、サカキ サイトが僕の記号。漢字で書くと、  
サカキ サイトは机から取り出したルーズリーフに坂城 西  
都、と流れるように書いた。  
「ひつだよ」

「坂城 西都くん、か。記号って？」

「記号だよ。」ここで僕を表す記号。」

何か機械的な感じだ。

「僕は、」

「わかつてゐるよ。浅野 真くん、だよね？ これも、」

「太陽の力？」

馴れてしまつた。

坂城 西都の会話には。西都は目を大きく開いて笑顔のまま僕の返事を受け取つた。

「そう、太陽の力。なんだ、わかつてゐるじゃないか。」

なんたつて君のような不思議少年と話しているんだ。それくらいもうわかるさ。僕は心の中で、そう喋つた。雲が空を覆いだした。

影になつて、僕の体には太陽の余韻が残る。

西都には僕が今喋つたことを読めないみたいだつた。

チャイムが鳴る。影の教室に湿つぽく響いた。

暗く湿った世界になってしまった。そして雨が降っている。

「雨も良いものだね」

僕の横にいる坂城西都が言つた。僕たちは一緒に下校している。

「匂いといい、音といい。晴れの日にはないものがあるよ」

傘にあたる雨の音の間から聞こえる坂城の声は澄んでいた。

「坂城は目的があつてここに来たと言つたよね？ その目的って一体なんなの？」

僕は傘で顔上半分が隠れている坂城に聞いた。

□元が決意したように動き、そして開いた。

「僕の目的はね、『影踏み遊び』だ」

よじよじうそう雨の音が強くなつたような気がした。

僕たちは歩みを緩めず一定速度で傘を手にもち坂を下つていてもつすぐ傾斜の駅前広場に続く歩道にでるところだった。

僕は『影踏み遊び』について考えた。

一歩歩く僅かな時間に思考する。

『影踏み遊び』は夕方、影ができる時に影を狙い合い、踏まれたほうが負けといった遊びだつたような気がする。坂城はそれをしきたのか？ 誰と？

「影踏み、遊び？ 遊ぶためにわざわざいく？」

湿り気たは最盛期になってきた。

吸い込む空気の水分含有量が異常だった。

そして僕は言葉を放つたのだった。坂城は傘をすりして僕を見上げて言った。

「『遊び』ではないけどね。でも、僕は来なければならなかつた。  
『影踏み』をしなければ、」

真摯な表情で言葉を締めくくった坂城。

僕は気になることがたくさんあつた。傘に落ちる雨粒よりももつと。

「誰の影を踏むの？ もしくは何の？」

「うん、」

間をおいて坂城が頷く。

「できれば、今から『言つ』とは信じてくれ」と坂城が言った。僕は頷く。坂城はそれを確認すると小さく頷いた。

坂城が口を開く。

「誰とか、何のじやなくて、踏むのは『影』そのものなんだよ」

&1t・第六話&gt; ;

『影』そのものとはなんなんだつ。

「詳しく目的のことを説明するにはまず僕のことを知つてもらわないといけない」

坂城 西都は立ち止まつて僕を見る。坂城の顔を幾筋もの雨が通り過ぎる。

「僕は『太陽の子』なんだ。」

坂城のことはわからなくなるばかりだった。

僕たちのほとんどは親から生まれてその人たちの子になる。

坂城は太陽から生まれたのか？ 熱いから無理なんじやないかな

「僕が君に言つことはどれも荒唐無稽なものばかりだね。でもわかつて欲しい。これらは真実だ。『太陽の子』は、まあ言つなれば太陽の精霊みたいなものなんだ。太陽がでている時にのみ活動する国、に住んでいる住民なんだよ」

僕の頭の中は本棚が地震で崩れたかのようにぐちゃぐちゃになつた。異世界。

僕は半開きの口を坂城に向けたまま話を聞いた。

「大丈夫かい？ 浅野くん」

「う、うん。大丈夫」

「そして」

と坂城は続ける。

「陰と陽があるように僕たち太陽のものと対になるものがいるんだよ。それが『影』さ

「影を倒しに来たのか」

僕は思つたまま言った。

「そうでもあるし、そうでもない。倒さなければならぬ『影』を倒しに来たのさ。 太陽の世界があるように影の世界もあるんだ。その間に君たち人間の世界がある。云わば人間世界というのは境界線であり国境なんだよ。太陽世界と影世界のね。その国境を越えようとする影がいるんだ。太陽世界を乗っ取ろうとする影さ。その影を僕は倒しにやってきた、まあ国境警備隊みたいなものかな

「なるほど」

平然と話す坂城に言った。

そして僕たちは再び歩きだした。雨の勢いは衰えて弱々しくなつていた。

前方に見えたのは駅前の商店街入り口だった。

商店街の界隈は小降りの雨で濡んで、濡れている。

どこか、冷ややかな雰囲気が漂っている。人通りはまばらだ。

傘もささずジーパンのポケットに手を入れてすたすた歩く金髪のお兄さんや、傘をさし杖をつきながら歩いているお婆さんなど、みんな自分の用事に合わせて行動している。

僕はといえば、坂城の歩幅に合わせて駅に続いて真っ直ぐに伸びた道路の右側、錆びた色の低い塀で囲つてある路地を歩いている。路地に沿つて様々な店が並んでいる。

低料金散髪屋、古本屋、レンタルビデオ屋、どの店も自分を主張するようにネオンを輝かせている。

どんより暗い雰囲気の漂つている駅前はネオンの光で居たたまれない場所のように見える。

「まるで都会の歓楽街に訪れたような気分だね」

僕たちがちょうど一番光を出しているレンタルビデオ屋を通り過ぎた時に坂城が言った。僕たちのいる此処つまりこの市はあまり都会じゃない。

地方都市とはまだ呼べないかもしない。

だが、この駅前のネオン煌めかせる店が立ち並ぶ辺り一帯はテレビでよく見る東京の歓楽街を想起させた。

「天候が天候だからね。そう思つのも無理はないよ。それにどの店も駅に集まる人を呼び込みたいだろ？し、目立つ手段は厭わないんだよ」

「それは大変だね。でもなぜか僕には疲れてしまうよ。そういうのは」

坂城は上半身を曲げて後ろを振り返りネオン煌めかせる店を見ながら言った。

「本当にまつたく」

坂城の生き方に少し親近感を覚えた。

「そうだね」

そんな会話をしているうちに坂城は目的地に向かう確実な歩幅になつた。

僕もそれに合わせる。

坂城が向かおうとしているのは店と店の間にある人が横に3人並んで通れる程の道だと分かった。

「ここだ」

坂城は道の入り口で立ち止まって言った。  
道は淡い闇に続いていた。

ネオンの光が入ってくることもない。

なぜ坂城がこの道を探していったのかは分からぬ。ただ僕は坂城についてきた。

「この道がなんなの？」

僕はそう聞いた。

僕たちはとっくに傘をさすのを辞めていた。  
弱い雨の線が坂城の横顔を突つ切つている。

坂城は僕のほうに顔を向けて言った。  
「ここに影がいる」

「影がいる」

坂城はそう言つた。目線は暗闇の裏路地に向いている。  
僕は坂城に任せるままにここまで来てしまつた。

好奇心と探求心が交互に僕を動かしたのだ。

ネオンの艶やかな光が僕たちを照らし、小雨が打つ。

「影つて何なの？」『影がいる』つて、それじゃあ

「うん。僕が言つ影は、光が生物の下敷きになよつて創り出す哀れな分身ではなく、『個としての影』なんだ」

目線は路地に向けたまま坂城が言つた。

「僕はそれを消すために来たんだ。これが君の知りたいこと占有率の大部分の答えかな？」

僕は頷いた。これはいよいよ巻き込まれたな、と思つた。

「君には悪いけど、この路地にいる影を消すところを見物してもらうよ。後々君にも役にたつかね」

一回頷きながら坂城が言つた。

僕の役にたつ？ 将来は会社勤めに身をやつす覚悟の僕にそれは役にたつかな、と思つた。

「じゃあ、行こうか

坂城が歩きだした。

僕もつられて歩きだす。

ビルとビルの間の袋小路は雨と空を覆つてゐる雲で陰気に溼つていた。

20メートル程行くと高い壁が行く手を遮った。

渦をまく湿気が僕の肺まで流れてきた。

「 出力するエネルギーは晴れの間に充填しておいたから、安心だ。問題は影の濃さとタイプかな」

坂城が囁くように言つた。

汗が鼻筋に浮いてきた。僕は何が起こうとしているのか何とかわかった。坂城は

「個としての影」

を消す、戦うのだろう。

そんな戦いを自分は見学できるのだろうか？ 僕は戦闘能力のない一介の高校生。

影が凶暴なものだったら自分はもしかしたら、

『二ーん、こん』

僕たちの背後からそれが聞こえた。そんなに離れていない。顔を左に向けて坂城を見る。

坂城はすでに音のほうを向いていた。僕もそちらを向く。

『こーん、こん、こん』

僕は音がしたほうを向いた。

確かに前のほうからそれは聞こえた。

しかし僕の視界にあるのは路地の暗闇が凝縮したような球形のものだつた。

いや、これなのかな。

坂城が言った影とは、人が一抱えできそうな大きさの暗闇の塊はまた鳴いた。

『こん、こーん』

「 浅野くん、下がついていてくれ。多少危険だから

坂城が左手で僕を後ろへと促す。

言われるとおり後ろへ5歩退いた。

「さて、と」

坂城は僕が下がつたのを確認すると、暗闇の塊と対峙した。

「そんなに濃くはないな。現存のエネルギーで充分に消すことは可能」

『「オオ、ゴオオ、ゴオオン！」』

塊が蠢きだした。

何かの形状に変わろうとしているかのように球形から突起がでたり、  
窪んだりしている。

「タイプは四足動物か」

球形だった塊は犬のような型を形成した。暗黒の色をした犬だった。

暗黒色の犬は吠えた。

『「ゴオオン！」』

『「ゴオオン！」』

今起こっていることについて、僕が認識できるのは悪い大型影と太陽の力を操る坂城が対峙しているということだけ。これから自分がどうなるのだろうとか、あの黒い物体が現れた仕組みとかは考えられず、ただ暗い路地裏での対決を呆然と眺めることしかできない。

すっかり侵されてしるね……じゃあすこりとサリを消してあげるよ

地図に掌を置いて回に向

方はそれに反応して身構えか、喉元に声をおこす

その時、薄暗いはずの雲のせいで時計としめた跡地裏に光が生じた。それは坂城の掌から発せられる光。坂城曰く太陽の力。

九月ノアノ

影の犬が跳躍した。黒い塊が坂城に襲いかかる。しかし、坂城は避けようとなかった。光を放つ掌を犬に向かたまま構えを崩さない。

僕はただ見ているしかなかつた。一介の高校生男子が勇気を捏造して立ち向かつて良い物ではないと分かつたからだ。分かつただけマシだと思った。

「わがた」

白い閃光が視界を包む。音はない、感覚もない。ただ白いだけ。急に視界が暗転。しかしそれは元の薄暗い路地裏が視認されたというだけ。幾ばくかの白い閃光の余韻を残しながら僕の眼は順応していく。

坂城は立っていた。背中しか見えないので表情は分からぬ。し

かし背中から疲労困憊な様子が見て取れた。

影の犬は、消失していた。もしくは蒸発した。影も形も見えなかつた。

「やはり、自分の身体からエネルギーを出すというのは疲れるよ。困憊しきつたね」

坂城が振り向いて言った。

顔には隈が出来ていた。坂城の白い肌には似つかわしくない。

「さてまあ、君も見ただらうけどさつしが影だよ。全ての影がああなるわけではけれど」

「ずいぶんと凶暴なんだね」

僕はやつと口を開けた。なんとか口<sup>び</sup>もらずに言葉を紡げた。

「ああ。だから僕たちが影を消す。さつきのようにね」

影は太陽世界を齎かそうとする存在。だから坂城たち『太陽の子』は影を消す。それはもう既知だ。

「しかも、」

坂城は続ける。

「人間が襲われる」ともあるしね」

「いやあ、疲れたね。1日一回が限度だよ。まあ僕が未熟者だからだけど

坂城 西都は餃子を箸でつつきながら言った。  
僕の前にも  
チヤーシュー麺の丼が置かれている。

『雷麵軒』は駅前にある中華そばの店であり、僕たち2人はあの影の犬との戦いが終結してから使い果たした体力（坂城のエネルギー）を回復させるために中華そばを食べに来たのだった。

「人間を襲うって、それは喰われるってことなの？」  
あの影の犬に

坂城は箸を両手に持ち、カーニのようになんと餃子をかき込んでいた。

坂城はコップに入った水を飲み干した。店内には様々な人が料理を食べていたけどこんなに目立つ人は坂城以外はいない。金髪というか白に近い色をしている髪の毛は地毛なのだろうか。

「影の素をね、生物に注入しちゃうんだよ。」坂城はコップを置いて言った。

「影の素を注入された生物は生物ではなくなり生物だつたことをも  
忘れて、ただ無差別に他の生物を襲うようになるんだ」

コップにキヤツチャーで水を入れる坂城。僕は坂城が発した言葉

に少し緊迫し、恐れた。

「そうなると、影はどんどん増殖し、影世界と太陽世界の均衡は崩れ、君たちの世界にも影響が出てしまう。・・・あの犬くんも影の元を注入されたんだよ。もう結構広がっているみたいだ」

坂城はコップをワイングラスにするように揺らしている。氷がぶつかる音がする。

こんな非日常なことに巻き込まれた僕とは対照的な店内に、何処か疎外されているような、僕と坂城だけ別空間で会話しているような感覚がした。

「坂城、くん。僕には何もできないよ。僕はただの高校生なんだ。何故僕を、何で僕にこんなことを教えたの？」

「・・・・」

坂城は僕の目を見た。「真くんは知らないんだよ。君自身の力を

を

## 第11話（前書き）

日眩がある。

「嘸然とした。

坂城の言った言葉に。

「君には特別なものが備わっているんだよ。あの時からね」

よく見ると坂城の頬には小さな何かが付いていた。たぶん餃子の具だらう。幾ばくか集中力を削がれた。

「あの時って？」

「僕たちが出会った時だよ」

坂城は滔々と語りだした。

「僕の若氣の至りだつたんだよ。そのせいで君を今回の戦争に巻き込んでしまつた」

「 - - 戰争？」

「君に出会つた時、僕は君の傷を治した。しかしそれがいけなかつた」

「 - - なぜ？」

「君の体には『影の素』に対する抗体が出来てしまつた。故に、君は唯一、影に浸食されない存在だということだ」

「 - - それは良いことなのか？」

「太陽世界最高学閥『日輪研究機関SOA』の観測結果でそれが解つた。SOAは僕との接触からずっと君を監視していたんだ。

そして僕の所属する『太陽世界防衛機関SOS』であることが決定された」

- - - ある」と?

「浅野真と共に『影』と戦う。浅野真には『盾』になつてもいい。我々、『太陽の子』が『影』に浸食されないための。そして浅野真を太陽世界へと連行し、『抗体』を作るための実験に協力してもらう。 - - - SOSが決めたことだよ」

目眩がした。

それは、横暴だ。

「それは、横暴だ」

僕は思つたままを口にした。普段、そんなことはなかつた。僕の意志を無視して、それに、『盾』になれと言つのか。

「ごめんよ、浅野くん。僕のせいだ」

でも、と坂城は言った。

「君にしか、頼めない」

## 第11話（後書き）

小説家に、なりたい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1080a/>

---

太陽の子

2010年10月10日02時07分発行